



けやき会通信



姉の闘病に寄り添って

新井 肇

私の姉も糖尿病（2型）でした。4年間の闘病の末、今年2月に90歳で亡くなりました。

死亡診断書の「直接の死因」欄には「多臓器不全」とありましたが、その原因をさかのぼる形で「心不全」、「虚血性心筋症」とあり、さらにその原因として「糖尿病」と書いてありました。たくさんの病気をしましたが、源流は糖尿病だったのです。

最初につまずきは4年前の「大腿骨転子部」の骨折でした。リハビリ病院で3カ月歩行訓練しましたが、歩行器と車いすの生活になり、要介護度2の認定を受けました。日課だった散歩も買い物も行けなくなり、活動量が激減してこれが糖尿病によいはずはありません。水野先生が講演会で、高齢者が転ぶと寝たきりになる。「ぴんぴんコロリ」のつもりが「ねんねんコロリ」になる、と言われましたが、この時はただの話として聞いていました。



1年半後、腸炎で入院、大腸に憩室炎ができ、膀胱とつながる「S状結腸膀胱瘻」になりました。死亡診断書には「直接死因に関係しないが傷病経過に影響した」と記載されました。

その2か月後に血糖値が440mg/dLとなり、腎臓の機能も悪化して3度目の入院。主治医はこのままいくと人工透析になると言いました。退院後はインスリン注射になり、私も毎月、車いすの通院に付き添い、主治医の診察に立ち会いました。このころ要介護度は4に「昇格」しました。

その1年後、自宅で胸が痛くなり、救急車で入院し、心不全と診断されましたが、間もなく心筋梗塞と判明、5カ所のうち2カ所にステントを入れましたが、決め手になるバイパス手術は高齢と持病のため断念、完全な処置ができなかったのです。最後は尿も出なくなり、お腹に水が溜まり、とうとう一度も自宅に戻れないで60日間の入院生活を終えたのです。

20年以上、節度ある療養生活を送りながら平穏に暮らしてきた姉に、いろいろな悪い病気が一挙に襲ったのです。主に腎臓と心筋に不具合が生じ、それで「多臓器不全」となりましたが、その原因は動脈硬化です。主治医は姉の血管の画像を見せながら、机をこぶしでたたいてこのくらい固くなっているのですと説明しました。水野先生が紹介されたオスラー博士の名言「人は血管とともに老いる」を思い出しました。

糖尿病患者の多くは血糖値の変化に一喜一憂し、自分の血管がどうなっているかは案外無頓着なものです。私もHbA1cが少し上がるとその日は酒を控え、下がると「今日は解禁日」だなどと言って甘いものをつまむと言った具合でした。7.0%を下回るともう安全圏に入った気になっていました。長年のヘビースモーカーが今日から禁煙したからもう肺ガンにならないと言ったらアホですが、私も同じような錯覚に陥っていました。血糖値は安定していても老朽化した血管が暴れ出さないように、血圧や高脂血症など、総合的なコントロールの必要性を改めて感じました。

4年間にわたって姉に寄り添い、糖尿病患者がどのようにして死に至るかを見つめました。糖尿病教室や「さかえ」で学んだことがいちいち思い返されました。姉が闘病生活に入った年齢に私も近づきつつあります。「血管」で死ぬか、ガンで死ぬか、ムダな抵抗はしませんがしっかり迎え討つ覚悟です。